

2022. 5. 15. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 12章 1～12節
『捨てられた石』

「ぶどう園と農夫」のたとえです。ぶどう園はイスラエル、所有者は神、僕は預言者、息子はイエスのことを意味しています。この何ら安全策も講じられない破れた寓話はマルコの作り話なんかではありません。実はこのたとえ話は、マルコの時代のガリラヤ地方で問題となっていた農地を巡る現実的な話なのです。

当時のガリラヤでは外国人が広い土地を占有して、その土地に住むユダヤ人に農地として貸していました。ところがゼイロータイ(熱心党)と呼ばれる過激な党派が、この外国人の不在地主に対するガリラヤの農民達を煽動して蜂起させ、こういった血なまぐさい小競り合いが各地で頻発していたのでした。マルコはそんな社会状況を反映させてこのたとえ話をしたためました。

7節で「これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。」とひどい言葉が書かれています。現在ではおよそ考えられないむちゃくちゃな話なのですが、これも作り話ではありません。当時、跡取りが死ねば、法律的に農民が相続権請求者として土地を所有することが出来たのです。

このたとえ話におけるマルコの視点は、事実上のイエスの死、つまり受難予告なのです。

なぜマルコはこんな寓話を通してイエスの死を予告したのでしょうか。そして、なぜここまでしてイスラエルに固執する必要があったのでしょうか。

それはマルコ自身も含めて初代教会とは何に属しているのかという点なのです。もちろん初期キリスト教はユダヤ教から派生しています。しかし、キリスト教が誕生したからといってユダヤ教と全く違うものとして産声を上げたわけではないのです。その根っこの部分で深く繋がっているのです。

それは歴史や律法理解だけではなく、体質という現実が繋がっているのです。

ユダヤ教の指導者達は、人々が預言者の語る言葉に耳を貸さぬようことごと

く預言者を抹殺して来ました。なぜかと言えば、自分達の地位・名声・財産が脅かされるからに他なりません。ここから個人の小さな正義は息を潜め、大局的な正義が誕生し、まかり通ってきたのです。そして今、同じ体質をもってイエスをも抹殺しようとしているのです。

つまり、神の真意は抹殺された側にあるということなのです。主流からつまはじきにされ迫害された側、「捨てられた石」にこそ福音が在るということなのです。

わたしたちは「現実を見据えよ」とか「現実に向き合え」と見聞きします。もっともなことだと思えます。しかし、例えば家庭にあっても妻の現実を夫は知りません。同じく働く夫の現実を妻は知らないのです。子どもや親の現実も知って来なかったのです。

一人ひとりが持つこのような個別の現実が「現実の問題と取り組み」という大局的な掛け声に打ち消されて無視され続けて来たのです。そこには、現実とは自分しか知らない局面であるという視点が根本的に欠けています。自分しか知らないところを、そこに注がれる神の想いを信じて生きることこそ現実的な取り組みが初めて成立するのです。

「捨てられた石」、しかし、これが「隅の親石」になったと聖書は語ります。福音とはこのように「そのひとり」に届く神の息吹なのです。